

遺族なればこそ

港南区支部 轟 アサ子（妻）

戦没者 轟 武廣

戦没地 沖繩県

あの戦争で、多くの若者が命を失い、その肉親や家族が過酷な運命にさらされました。私には想像もつかない苦しみを味わった方々が、私の回りにも沢山居ります。それから比べれば、私の体験などはまだまだ軽い方ですが、敢えて私の体験を記すことで、二度と忌まわしい戦争を起こさないこと、これ以上遺族を増やさないことを訴えたいと思います。

日本の敗色が濃厚になり始めた昭和十九年二月、私は新宿花園町の花園神社で結婚式を挙げました。十九歳でした。これが、甘い新婚生活の始まりではなく、苦難の始まりでした。

というのも、神社で式を済ませて、自宅に戻った私たちを待ち受けていたのは、二人の憲兵でした。新郎になったばかりの轟武廣のもとに憲兵が持ってきたのは、結婚祝いの品物ではなく、赤紙、召集令状でした。

式を挙げる前、彼は満州の奉天にいました。私との結婚が決まり、日本に帰った後、召集令状が奉天に届けられたのです。奉天にいないことが分かり、逃亡したものと見なされて、憲兵が後

を追いかけてきたというわけです。事情は理解してくれましたが、だからといって、召集を延期してくれるほど憲兵は甘くありません。直ちに奉天へ行けと言うことで、予定されていた披露宴会場は蜂の巣をつついたような騒ぎになりました。

すぐにタクシーを呼び、私も同乗して東京駅に向かいました。駅に着くまで約二十分間、車中、武廣は終始無言でした。

「どんなことをしても生きて帰ってきて…」と、やつとの思いで言葉をかけた私に、彼は「そうする」とだけ短く答えました。これが私と彼が交わした最初で最後の会話でした。当時、出征する兵士に対して「生きて帰れ」というのはタブーでした。でも、私にはそれしか言葉が浮かびませんでした。

車を降りた彼は、そそくさと切符を買い、そそくさと改札を通り、たちまち人混みの中にもまれ、折良く滑り込んできた列車に乗って、私の目の前から消えてしまいました。

これで二度と会うことはないだろうと予感しましたが、余りにも激しい環境の変化で、十九歳の小娘は、その変化について行くことが出来ず、頭の中は空っぽでした。

出征後、ほどなくして彼から一枚の葉書が届きました。葉書は沖縄からでした。彼からの便りはこれが最初で最後でした。その時は、沖縄が激戦地になるとは夢にも思いませんでした。

このころ、日本の敗色は、ようやく濃さを増していました。マリアナ沖海戦での海軍の敗北、サイパン島守備隊の玉砕、グアム、テナアンで全滅といった悲報が相次ぎ、そして、十一月二十四日、東京はB29による初の空襲を受けたのです。幸い、私の住んでいた花園町は空襲を免

れましたが、強制疎開の対象となり、中野区へ、そして更には、千葉市へと移りました。私は養母と一緒に生活をしていましたが、この時はまだ、水準以上の生活を保っていました。

ところが、昭和二十年七月七日、千葉市はB29による大空襲を受け、命からがら逃げまどうのが精一杯で、ここで全てのものを失いました。大切に持っていた彼からの葉書もなくしてしまいました。

これからが私の苦難の始まりでした。自分一人ではなく、年老いた養母を抱えて食べていかなければならないのです。千葉から成東町、勝浦と転々とし、生きるために落花生やら、魚やらを売り歩く、いわゆる「闇屋」をやりました。このころになると「何も知らない悲劇の花嫁」から「恐れを知らない逞しい女」に成長していました。今の私の生命力は、この時に培われたものかも知れません。勝浦では漁業組合に就職しましたが、事務だけではなく、荒くれ男に混じって、櫓を漕いで和舟を操り、魚をトラックに積み込んだりと、力仕事でも男には負けない荒技に挑んでいました。

夫武廣の戦死の知らせは昭和二十一年になって私の手元に届きました。そこには「二十年六月二十四日、沖縄糸満市大里の壕の中で戦死」とありました。終戦前、沖縄で激戦があり、多くの日本人兵士が戦死したという話は聞いていたので、ある程度の覚悟は出ていましたからショックはありませんでした。

挙式から五十二年の歳月が流れた平成八年九月、私は沖縄の糸満市を訪ね、彼が戦死したという壕の跡を訪れました。糸満市の空は青く澄み渡っていました。ここで、激しい戦争が繰り広げ

られたなんて想像も出来ないことでした。こんな平和なところで二度と戦争が繰り広げられることのないように、そして二度と悲劇の遺族を増やさないようにと祈りました。

「そうする」と私の耳に彼の声が響いたように思えたのは、幻聴だったのでしょうか。